精神科急性期治療病棟での転倒状況の変化と課題

第10回北海道病院学会
平成22年7月10日

五稜会病院　藪内 裕介 長岡 美由紀
飯沼 紀子 八木 こずえ

目的

精神科急性期病棟における転倒症例の実態を追跡調査し、対策の再考察を図る。

方法

インシデント・アクシデントレポートで提出された転倒症例を項目別に比較検討。

調査項目
・転倒割合　・年齢　・考えられる転倒原因
・転倒へ至る行動目的　・現場　・時間帯
・予防するための対応策

調査期間

1回目調査：H17年1月より27ヶ月間
2回目調査：H19年7月より30ヶ月間

五稜会病院 精神科急性期治療病棟の概要

・病床数：38床（個室20床）
・対象疾患：統合失調症、気分障害、アルコール依存症、人格障害など
・平均在棟患者数：約33名（H22年度）
・平均在棟日数：約43日（H22年度）
・平均年齢：約41歳（H22年度）

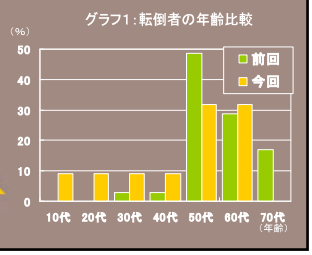
結果1　転倒症例数の減少

[転倒数の比較]
転倒報告数/全報告数
35/118症例（29.7%）→23/123症例（17.9%）

11.8%の減少

[年齢]
50代より転倒数が激増する傾向は大きく変化なし。

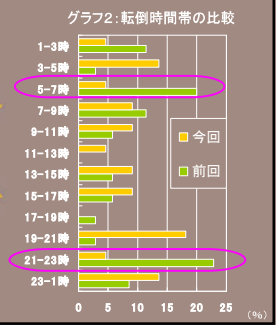
前回0～5%であった10～40代が増加。



結果2　転倒をめぐる状況の比較

前回調査結果：睡眠時間帯における個室利用者の排泄による転倒が多い

[転倒時間帯]
・5～7時、21～23時帯の転倒数が大きく減少。
・反対に日中など、活動時間帯の転倒数が平均的に増加している。



結果3　転倒をめぐる状況の比較

[転倒原因となる行動]
・精神症状の多動性による転倒の増加
⇒ 25.7%から31.9%
・薬効によるフラツキと考えられる転倒の減少
⇒ 48.6%から32.1%
・排泄行動前後の転倒の減少
⇒45.7%から27.3%

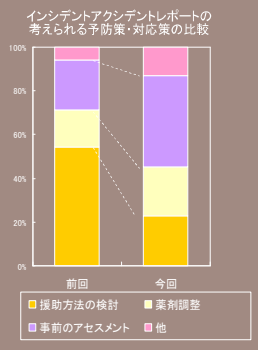
[転倒現場]
・個室内転倒の減少　⇒ 48.6%から36.4%
・活動の場であるディールームや作業療法室での転倒が増加

結果4　転倒対策の意識変化

五稜会病院

[転倒対策]
スタッフの考えた対応策

1、事前のリスク判定は増加
⇒ 22.9%から41.6%
2.薬剤調整は増加
⇒ 17.1%から22.7%
3.援助方法検討は減少
⇒ 54.3%から22.7%



考察

五稜会病院

・対策強化による転倒数の減少と新たな傾向発生

1. 導き出されたリスクを現場に還元することが、リスクマネジメントにつながっていく。

・新たな転倒しやすさの内容把握

2. 50代未満の患者へのリスク意識を高め、日中活動の場での転倒対策の必要性がわかった。

・対策の視点の変化と広がり

3. 看護職のみの対応策ではなく、医療チームとして連携した対策が転倒減少へとつながる。

まとめ

五稜会病院

① 追跡調査により、前回のリスクへの対応の効果を確認し、新たな課題を明確化した。

② 今後の課題・対応策として、リスク判定の精度を上げるとともに、他職種による包括的な対応の向上が重要である。

③ 定期的に症例を分析し、明らかになった結果を情報としてスタッフへと還元していくことは医療安全の視点から有用な対応策になる。